



バッハの無伴奏曲が心地よく染み入る季節になった。小さい頃から一人で自転車に乗り、遠く離れた場所に行ってみる冒険が好きで、一人旅がしたくなつたのか、親には告げず祖母の住む家まで汽車に乗って行き、1〜2時間遊んで、かごに入った小鳥のお土産を抱えて帰宅した頃は真つ暗になつてしまったこともある。駅で切符を買う時に、目の高さくらいある木製の台越しに見える窓口から制服の駅員さんが手渡してくれた切符を手にした時の期待感が今でも残っている。心配のあまり両親から叱られた記憶は飛んでいるが、気ま

## スピリチュアリティを感じるとき

情報広報部副部長

藤井 美穂

まに育ってしまった。親が読んで欲しいと並べた文学書には目もくれず、鉄仮面や海底二万里などの冒険物語ばかり読む女の子だったが、ポスト団塊の世代の女の子らしく習わされたピアノは大学に入るまで続けていた。シヨパンとベートーヴェンが好きで、母親と喧嘩した時に、決まって鍵盤をたたきつけたのはベートーヴェンのピアノソナタ熱情だった。当時バッハにはなんの魅力も感じなかった。せっかくならば行ってもらった高名なチエロ奏者であるピエール・フルニエの演奏も熟睡、アンコール演奏が終わった拍手で目覚

めたものだった。

しかし60歳を過ぎた頃から、クラシック音楽の音色が心地よくなった。ある日、フルトヴェングラーのベートーヴェンに感動し、揺さぶられた。高性能ステレオ録音とは異なるモノラル録音のそれからはフルトヴェングラーの祖国に対する思いが強烈に伝わってきた。彼は1886年ベルリンにて誕生し、考古学者の父がミュンヘン大学に移動後、ずっとドイツで音楽を続けてきた。ナチ政権下では、芸術や音楽を政権維持の目的で取り込もうとする施策のため、不本意に反ナチ派から

批判されたこともあったが、ユダヤ人音楽家を匿ったり、時の政権批判をして反ナチの原稿をメディアに投稿したり、祖国ドイツを音楽の面から愛し守ってきた。1922年にベルリン・フィルハーモニーの常任指揮者に就任後、1947年終身指揮者となり抗生物質による難聴に悩まされるまで生涯タクトを握っていた。

イツァーク・パールマンも好きなバイオリンストだ。1945年ポーランドから移住したユダヤ系理髪師の息子としてイスラエルのテル・アヴィヴに生まれた彼は、3歳時にラジオのバイオリン演奏を聴いて感動し、4歳3カ月でポリオに罹患し下半身不随となつてからも、そのストラディバリウスから出る音色と正確な音程は格別である。

8歳の時服用した抗生物質でステイロイド

ス・ジョンソン症候群に罹り、後遺症の角膜損傷で視覚障害を負った天才日本人バイオリンストの川島成道の音色の透明さにも高揚させられる。彼が札幌で演奏会がある時は、私の勤務する病院の緩和病棟でも、演奏をしてくれていた。部屋から出られない患者さんのベッドサイドで、涙を流しながら聞く患者さんにその音を届け、次の部屋でまた奏でてくれた。

「スピリチュアリティ」は、スピリチュアル・ケア学会をはじめとして、最近では医療、臨床心理などの領域でよく聞く言葉だが、調べるに必ず宗教や心霊などの踏み込めない世界につながる。無神論で生きてきた私には、スピリチュアリティの意味は全く伝わってこなかった。しかし、音楽や人間の力の及ばない大自然の営みに直面した時に魂が揺さぶられるように感じることもスピリチュアリティ体験であり、スピリチュアリティは人間に普遍的に存在する心性であり、経験や実践を通して感得される感性に基づいている、と述べている社会心理学者である中村雅彦氏の説明であれば、理解が可能である。

経済だけが優先されるようになった日本社会では、若者たちの感性も干上がってしまった。私がフルトヴェングラー、パールマン、川島成道の音楽に揺さぶられるのは、彼らが思想統制や下半身不随、光を失うなど過酷な大きな試練の中においても音楽を続けた強い思いに、きつと私の感性が震えたからだ。若い世代の感性が干上がらないように、できることを探していくのが役割であろう。